博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　八木久美子

学位申請者　勝畑冬実

論　文　名　近現代イスラーム改革思想におけるハーリド・ムハンマド・ハーリドの再評価

【審査結果】

2011年9月9日、八木久美子（主査）、酒井啓子、飯塚正人、林佳世子、青山弘之からなる審査委員会は、標記博士号請求論文の審査ならびに最終試験を実施した。

本学位請求論文は、20世紀のエジプトを代表する知識人であるハーリド・ムハンマド・ハーリド（1920 - 1996）（以下ハーリド）の思想を分析し、この人物が1980年代に顕著になるいわゆるイスラーム復興の流れのなかで「セキュラリズム」陣営から「ファンダメンタリズム」陣営に転向したと見る従来の評価に見直しを迫ったものである。

本論文は代表作とされる二つの著作を分析し、従来の見方の大前提となっている「セキュラリズム」対「ファンダメンタリズム」といった枠組みをイスラームの事例に持ち込むことの有効性を否定するだけでなく、ハーリドの思想は一貫しており転向といったドラマは起きていないこと、さらには彼の周辺で起きた論争は常に、イスラームをどう理解するか、シャリーア（イスラーム法）をどう捉えるかという徹頭徹尾イスラーム内部の議論であり続けたことを明らかにした点で高く評価される。

よって、審査委員会は論文審査と最終試験（公開審査）の結果、全員一致で学位申請者に対して学術博士の学位を授与するのが適当であると判断した。

【論文の構成】

本学位請求論文の構成は以下の通りである。

はじめに

第一章　『我らここより始めなん』の執筆をめぐって

第二章　『我らここより始めなん』の内容分析

第三章　『我らここより始めなん』への反論

第四章　ハーリドとナセル

第五章　『イスラームにおける国家』の再検討

第六章　ハーリドの再評価に向けて
おわりに
参考文献

以上本文　97ページ
参考文献　10ページ
全　107ページ

【論文の概要】

「はじめに」では、ハーリドの著作の中から1950年に出された彼の処女作『我らここより始めなん』が政教分離提唱の書と見なされてきたこと、そして1981年の『イスラームにおける国家』がファンダメンタリズムへの転向の書と見なされてきたことを確認する。その上で本論文の狙いとして次の二点を挙げる。第一に、ハーリドを「セキュラリズム」から「ファンダメンタリズム」へ転向した思想家と捉えることについて検討することが挙げられる。ハーリド研究に限らず、これまで20世紀のイスラーム世界の思想家に関してはこの二つの概念によって分析されることが一般的であったが、この大前提を問うことが問題意識の根底にあることが記されている。第二の目的とは、ハーリドについてはこれまでは個々の著作に対する分析が先行し、思想家としての全体像に触れた研究がないことを踏まえ、彼の思想の総体を20世紀のイスラーム思想史のなかに位置づけることである。

第一章では、ハーリドという人物について、アズハル大学というスンナ派イスラーム世界でイスラーム諸学の最高学府とされる大学を卒業した後、公務員として働きつつ、生涯約40冊の著作を出版したエジプトの知識人であることが紹介される。続いて、『我らここより始めなん』の書かれた時代、エジプトは1919年革命により「名目上」イギリスから独立をしたものの国造りは難航し、政治的には混乱を極めていたことが説明され、ハーリドを執筆に駆り立てたのが強い危機感であり、改革への強い意志であることが確認される。また『我らここより始めなん』は最初、アズハルにより発禁処分が言い渡されるが、その理由は本書の内容ではなく、売れ行きを心配したハーリドの弟子が行なった誇大広告であった。そのことが明らかになり、最終的には処分は撤回されるものの、この一件によりハーリドには反アズハルというイメージが誕生したという経緯が紹介される。

第二章では、同書の内容分析が行なわれる。ハーリドが提言するのは、ウラマー層の政治介入阻止、穏健な社会主義政策の導入、女性の社会進出等である。この著作が政教分離の書、「反宗教」の書と見なされる最大の原因は、まさに「聖職者の職域を魂の教導に限定する」という提言にあるが、ハーリドが論拠とするのがコーランやハディースをはじめとするイスラーム的なテキストに限定されず、ヴォルテールなど西洋の文献も使われてい

ることも影響していることが指摘される。しかしながら、この提言の真意は宗教を敵視し、その社会的機能を否定しようというのではなく、すべての国民が政治に参加し、穏健な社会主義的政策を導入することこそ、真のイスラームの教えであると主張することであったことが確認される。

第三章では、『我らここより始めなん』に対してどのような批判があったかを、ムハンマド・ファリード・アル＝ワジュディー（1875-1954）およびムハンマド・アル＝ガザーリー（1917-1998）（以下ガザーリー）という二人のウラマーを例に挙げて紹介する。内容から言うと、どちらの批判もハーリドの問題意識を理解しておらず、そのため論点がずれており、ハーリドに再考を迫るような力を持ったとは考えにくい。しかしながら、西洋の文献に基づき、イスラーム攻撃を企てる帝国主義のエージェントであるとして、当時のエジプトを代表するようなこの二人のウラマーから批判を受けたという事実は、ハーリドに「反イスラーム」「反宗教」のイメージを与えることに貢献したという指摘がなされる。

第四章では、ナセルが、農地改革、アズハル改革などハーリドの提言を実行したことが、ハーリドはナセルに近い人物であるという見方を生み出し、さらにナセルとムスリム同胞団との対立が激しくなる中で、同胞団の論客であるガザーリーがナセルへの批判を強めると、ハーリドの「セキュラリスト」イメージはますます強まる。しかしながら、ハーリドがナセルの御用学者ではなかったことは、1961年にハーリドが人民勢力国会準備委員会でナセルの独裁志向を厳しく批判し、国民の政治参加を強く訴えていることから明らかである。このようにして、宗教に対して敵対的な立場をとる、あるいはムスリム同胞団と対立するところのナセルと手を組むといった、これまでハーリドを「セキュラリスト」と見なす根拠とされていたものがどれも真実ではないことが明らかにされる。

第五章では、『イスラームにおける国家』の時代背景が紹介される。1970年、急死したナセルの後を継いで大統領になったサダトは次第に独裁者の顔を露わにし、さらに支配者としての正統性の根拠を宗教に求めようとした彼の政策は、さまざまなイスラーム勢力の台頭につながっていく。こうした状況で書かれた『イスラームにおける国家』においてハーリドが『我らここより始めなん』における自らの誤りを認めていることこそ、本書を転向の書と見なす原因となったことが確認される。しかし内容を詳細に分析すると、撤回されたのは「宗教政府」と「イスラーム政府」を同一視したこと、その一点のみである。さらにハーリドが言おうとするのは、「イスラーム政府」は「宗教政府」と異なり、国民すべての政治参加を求めるものであるという主張であり、この点で本書の議論は『我らここより始めなん』とまったく変わっていない。よって、転向は起きていないという結論が出される。

第六章では、まず「ネオ・モダニスト」あるいは「宗教的自由主義者」と呼ばれ、ハーリドに近い立場にある者として取り上げられることの多い、ファズルル・ラフマーン

（1919-1988）およびムハンマド・サイイド・アル＝アシュマーウィー（1932- ）と比較がなされる。その結果、両者はイスラーム観についてはハーリドと共通している部分があるものの、ハーリドの特徴である社会・政治改革に対する強い問題意識は共有しておらず、ハーリドをこの陣営に位置づけて済ませるのは適切ではないことが明らかにされる。

続いて、現在のスンナ世界でもっとも著名なウラマーの一人であり、ムスリム同胞団に近い人物とされているユースフ・アル＝カラダーウィー（1926-）（以下カラダーウィー）との比較を行う。従来の図式に従えば、「ファンダメンタリスト」のカラダーウィーとハーリドの間にはまったく共通項がないと考えるのが自然だが、事実はその逆であることが示される。カラダーウィーはその著作の中で、ハーリドの名を挙げ、ハーリドの論に依拠しながら自分の論を展開している。カラダーウィーは「シャリーアの意図」というこれまであまり注目されてこなかった考え方に着目し、シャリーアを理念として捉え、その意図、目的を実現するためには手段は異なってよいと主張する。よって西洋の民主主義の考え方、制度などを借用することは可能という立場をとることが示される。

従来、いわゆる「ファンダメンタリスト」側の思想的系譜に関し、ラシード・リダー（1865-1935）によるイスラーム政府の議論を継承し、それを現在のカラダーウィーに繋いだのは、ムスリム同胞団の設立者であるハサン・アル＝バンナー（1906-1949）だとされてきたが、実際にはその役割を果たしたのはハーリドであるという重要な指摘がなされる。

「おわりに」では、ムスリム同胞団が1990年代に見せた変化を追う。この時代、同胞団はそれまでの言説を捨て、民主主義の実現をスローガンとして掲げるようになる。さらに1996年には若手のメンバーが分離して「ワサト党」を結成し、国民主権、政治的多元主義などを掲げており、その動きの中にハーリドのメッセージと重なる部分があることが指摘され、ハーリドの思想の今日的意義が示唆されている。

【論文の評価】

ハーリドをはじめとする知識人の「転向」については、イスラーム復興のインパクトの大きさを物語るものとしてしばしば語られるが、実際にはそのような衝撃的なドラマは起きておらず、かつ正反対の考え方を持つ二つの陣営で論争がなされ、最終的に宗教側が勝利したという見方も修正が必要であることを示したという点で本論文は高く評価できる。とくに、一次資料を丹念に読み込むことによって、従来の図式で言えば正反対の位置にあるはずのハーリドとカラダーウィーの間に重要なつながりがあることを発見した点は意義深い。

また、近現代のイスラーム思想を分析する際、広く使われてきた「セキュラリズム」および「ファンダメンタリズム」というような概念は、実際には西洋のキリスト教世界の経験から生まれたものであり、そのコンテクストの中で生じた多くの含意を持つ。こうした

概念をイスラームに適用することの不適切さについては近年繰り返し問題提起されてきたが、具体的な事例を用いてこうした枠組みを使うことから生じる問題の所在を明らかにした例は少なく、その点においても本論文の意義は大きい。

以上の点について、審査委員から高い評価を得た一方、いくつかの問題点が指摘された。その主たる講評は、以下のとおりである。

(1) 著作の内容についての分析は精緻に行われているものの、そのときに書き手であるハーリドが置かれていた環境、社会の状況など背景についての議論が充分ではない。

(2) 「セキュラリズム」と「ファンダメンタリズム」という批判の対象となる概念に関し、個々の言説あるいは論者ごとの捉え方、定義について曖昧な論述が散見される。

(3) 「セキュラリズム」と「ファンダメンタリズム」という二項対立の図式でハーリドを捉えようとしたのは誰なのか、本論文が批判の対象としたのが外国の研究者なのか、それともそれに影響されたエジプトの知識人や活動家なのか、問題の場が明確にされていない。

以上の批判に関し、(1)については資料が絶対的に欠けているという事実はあるものの、申請者自身、ハーリドの人物像を浮かび上がらせるためには必要不可欠であることを認めるものであった。(2) に関しては、定義に関する論述の不足が反省点として認められた。(3)については外国の研究者の影響を受けたエジプトの知識人が対象であるという回答がなされた上で、それが論述の中で明らかになっていない点は反省すべき点として認められた。

【総合的な判断】

以上のような問題点はあるものの、論文自体の完成度の高さは審査委員全員の認めるものであり、また審査委員からの質問に対する申請者の回答も的確で誠実であり、本論文から今後さらに研究が発展していく可能性を強く印象づけるものであった。

よって、上記の問題点は本学位請求論文の価値を損ねるものではないばかりか、むしろ研究内容の今後の発展性を示したものと判断した。その結果、審査委員全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するに値するものであるという結論に達した。